

「只見 移住物語」

地域共生 編

編集・連絡先：只見町役場 地域創生課

TEL 0241-82-5220

FAX 0241-82-2117

「只見 移住物語」地域共生編 目次

- 第一章 《これからは集落のメンバーとして、何かを作りだそうという想いで、ここに来ました》
任意団体「森林の里 応援団」森林の分校 ふざわ 管理人（二地域居住）
藤沼 航平 様（30歳）
- 第二章 《自然の猛威を目の当たりにして「ここ（只見線）で働いている後輩も同じポツポツ屋じゃないか、何とかしなければ」という想いがこみ上げました》
民泊 縁樹の家・「ほっとランド・フォレスト只見」代表
松崎 顕 様（64歳）
- 第二章 《ある新聞記事を見たことです。『老舗旅館売ります』という記事でした。読売新聞（2003年6月8日付）に載っていました。この記事を読み、只見町のことを知り、この建物が頭から離れなくなっていました》
扇屋本館 つばめ荘 経営
広井 トヨ子 様（70歳）
- 第四章 《「新しい産業を作らなければ」この想いに至るきっかけは、只見高校で勤務していたときの体験にあります》
薬草 芍薬栽培・自然ガイド（二地域居住）
高原 豊 様（64歳）
- 第五章 《「縁樹の家」に都会の人たちが来ることにより、只見町との交流が生まれ、只見線の利用客も向上します。また自然の中での暮らしを体験し、年に数回只見町に足をはこぶことにより関係人口が生まれます》
民泊 縁樹の家 管理運営（二地域居住）
築瀬 栄一 様（61歳）

「只見 移住物語」

地域おこし協力隊を経て

任意団体「森林の里 応援団」森林の分校 ふざわ 管理人

【移住者のご紹介】

- ・お名前：藤沼 航平 様 (30 歳)
- ・ご家族：藤沼 祐紀 様 (妻 29 歳)
- ・いつ：2017 年 4 月
- ・どこから：栃木県 下野市
- ・どこへ：只見町 明和地区 布沢区
- ・いましていること：任意団体「森林の里 応援団」森林の分校 ふざわ 管理人
- ・まえにしていたこと：全農 とちぎ 職員



森林の分校 ふざわ 玄関にて

【始まり】

大学在学中から全農とちぎに勤務しているときも週末になると継続して、この集落布沢に通っていました。最後の方はほぼ毎週末来ているような感じでした。いっそここで貢献できる仕事があるなら、通うのではなくここで働こうかと思い始めたころあいに、地域おこし協力隊の募集をしていることを知り、応募しました。そもそも布沢との関係は大学3年生の時、2010年だったと思います。私の専攻は農業経済学科で、農村社会学というゼミに入っていたのですが、授業の一環で「地域振興」とか「農村振興」、「地域作り」を勉強する過程で関わり合いになるきっかけが生まれました。

大学生の力を使って地域活性化をするというゼミがありました。今も継続してあります。福島県が、大学生の力を使って地域活性化を図りたい地域、集落と日本全国の大学をマッチングさせていて、たまたま布沢集落が手を挙げ宇都宮大学とマッチングすることになりました。それでF沢を訪れることになりました。学生時代から通算すると5~6年布沢に通ってから地域おこし協力隊としてきました。

社会人の経験は4年間全農とちぎで働きました。最初の2年間は総務課で管財関連の仕事を、後半は園芸部で勤務しました。例えば野菜関連事業で保険的な業務があるのです。組合員の方が加入していて野菜の価格が下落したようなときに、積み立てたものから保険金を支払うと言ったような補助金業務です。もう一つは切り花の営業です。農家が作った切り花を市場に売ると言う仕事です。栃木県花きのメイン市場は東京の市場（大田市場と世田谷市場）と仙台市場なので、両市場に営業で通っていました。その全農を2017年3月に退職、翌月4月に引っ越してきました。

【家族】

迷いはなかったので両親へ相談することはありませんでした。一社会人で自立もしていたため、両親に相談するという選択肢は考えませんでした。全農を退職し、布沢に行くことが決まってから、両親へ報告をしました。母は、常になんであつても応援してくれるので「貴方のやりたいことをしなさい」と背中を押してくれました。父は、現状から大きく変化すること、安定した全農を辞め、どこにあるのかわからない場所へ行くことが、理解できなかったようで戸惑い、動揺していました。

学生時代から社会人になった後も布沢へ通い続けた6年間、その間に私が悩み、考えたことを、いっぺんに理解することは難しかったのだと思います。いまの父親は、私がしようとしていることを理解し、見守っているといった感じです。

【準備】

仕事をしながら毎週只見に通い、いつかここに来てなにかをしてみたいとは思っていましたが。決断したタイミングは明確ではありませんが、地域おこし協力隊の募集が出たのが2

月で、募集が出て3日後に電話をした記憶があります。当初 只見町では地域おこし協力隊募集がなく、隣の南会津町に応募しようかと考えていました。南会津に応募しようと考えていたさなか、只見町からも地域おこし協力隊の募集が出たのです。地域おこし協力隊の募集情報を扱うサイトがあり、そのサイトを確認していました。

地域おこし協力隊のミッションは、森林の分校 ふざわを拠点にして山村振興を企画・実践することでした。只見町が住居を用意してくれることになっていました。面接するときにはわがままを言わせてもらい布沢に住みたいとお話をして、探して頂きました。

【現在】

地域おこし協力隊となった際に、地域おこし協力隊の任期は最大3年という事を知っていましたので、任期を終えたらどうなるのかなとは思っていました。しかし、いまその答えが具体的に見えてきたところですよ。

【変化】

移住後の変化は、自分の時間が持てるようになったことです。前の仕事は結構忙しい仕事でした。こちらに来て自分の時間が持てるようになりました。もう一つ大きな変化は健康になったことです。もともとアレルギー症で、花粉症がひどかったのですが、こちらに来て花粉症の症状が改善しました。こちらの方が花粉は多いのにも思われるかもしれませんが、花粉症の原因は花粉ですが、その花粉が都会へ飛んでゆくと排気ガスとか色々なものと吸着するのです。それを吸うのでより症状がひどくなっていく。宇都宮ではそうでした。ところがここに来てからは生の花粉しか吸わないので、花粉症は良くなっています。

冬になるとジンマシンが出ることもありましたが、こちらに来てからは少なくなりましたし、風邪も年に1回ひくか、ひかないくらいになりました。宇都宮にいたころは毎日ほぼコンビニ弁当でしたが、こちらに来てからは毎日自分で料理をして食べる生活です。食品添加物を取らなくなったからなのか、新鮮なものを食べるようになったからなのか、何が理由かわかりませんが健康になりました。ただ体重は増えてしまいました。お水とお米が美味しいからです。

【将来】

これからどのような事をしたいのか、どう生きて行くのかは、はっきりと決めてはいません。可能性を探っているところでしょうか。ただ当面は森林の分校の経営に携わりたいと考えています。いま楽しみにしていることにもなりますが、自分で企画し、ツアーを組んで、自分で連れてきたお客様と、ここ布沢で一緒に過ごす事にとってもやりがいを感じます。

この集落は地域おこしや、地域作り、地域の活性化に積極的な集落です。ここに来た理由

にも関わりますが、いままでは外側から応援する立場だったが、これからは集落のメンバーとして、何かを作りだそうという想いで、ここに来ました。その実践を森林の分校を拠点にして作り上げて行きたいです。



森林の分校 ふざわ 全景

【不便】

暮らし始めて困ったことは、雪かきの仕方も、草刈りの頻度が分かりませんでした。今でこそ慣れましたが最初はどうのようにしていいのか判りませんでした。ここは集落水道（沢水、湧き水等を貯め、簡易濾過して飲料水とする方式。塩素等の薬剤は入れていない）なので、大雨が降った後 水が濁ることがあります。普段は美味しい水なのですが、集落の方は大雨の後は飲まないようにしている事を知らず、飲んでしまい、お腹を壊したことがあります。

【健康】

年齢的にまだ若いので、特に気にしていることはありません。ただここに住んでいると生活リズムが自然と「早寝、早起き」になって行きます。例えば草刈りなら日中は暑くてできないから朝早く起きてするとかです。雪かきも同じですね。

【アドバイス】

やはりその地域に合う、合わないと言うことはありますので、何回か通ってもらい、一緒に行事に参加するとか、地域の方と触れ合ってもらい、その上で決断することが良いと思います。

こちらに住み始めて、こうしておけば良かったと思うこととは、何かしら物事を始めようとする時は、やはり話を通しておくべきところへ話を通しておかないと、後々面倒になることが起きる可能性があると言うことですか。それも話を通して置く先はたくさんあり、バラバラなことが多いです。区長をはじめとする区の組織だけでなく農事組合があったり、テレビ組合があったり、水道組合、草刈りの組合等、それぞれの首長と顔つなぎをして話を通しておく。何かする時にはその人に話を通しておくことが必要で、それをしてからすれば良かったと思う事が最初の1~2年はよくありました。

【生活】

ご近所とのお付き合いで心がけたことは、集会や BBQ とか行事ごとには参加するように心掛けました。

【印象】

布沢を初めて訪れた時、大学3年生の頃ですが、その時の印象は「山を越えても、超えても辿り着かないなあ」と感じました。「どこに連れて行かれるのだろう」とも思いました。と言うのは宇都宮から来ると峠を三つくらい越えないと到着（栃木→日光・鬼怒川→田島→駒止峠→布沢）しないのです。

それまでも栃木県内でいろんな農村に行き、色々な活動、例えばボランティアとか草刈りとか、棚田のオーナー制度を経験してきましたが、栃木県のどの農村よりも昔のままの風景が残り、自然が豊かで、昔ながらの暮らしをしていました。言い換えると過疎が一番進んでいると感じました。

【二地域居住】

私は2017年4月に布沢に移り住みました。その後生活が落ち着いた翌2018年6月に結婚、いま南会津町に住んでいます。この理由は妻の仕事の都合と、栃木へ戻る際の交通の便が良いからです。森林の分校にお客様がいる時は分校か布沢集落で借りている空き家に泊まりますが、お客様がいない時は田島へ戻る人が多いです。

2020年8月14日 「森林の分校 ふざわ」にてインタビュー
インタビュアー 移住コーディネーター 生天目 博

「只見 移住物語」

民泊 ^{えんじゅ} 縁樹の家 / 「ほっとランド・フォレスト只見」 代表

【移住者のご紹介】

- ・お名前：松崎 顕 様 (64 歳)
- ・ご家族：美幸様 (妻 56 歳) ・長男 (独立 29 歳) ・次男 (独立 24 歳) ・長女 (21 歳)
- ・いつ：2017 年 1 月
- ・どこから：埼玉県 上尾市
- ・どこへ：只見町 明和地区 布沢区
- ・いましていること：民泊 縁樹の家 管理人、ほっとランド・フォレスト只見 代表
- ・まえにしていたこと：JR 東日本



民泊「縁樹の家」エントランス前にて

【始まり】【準備】

2016年11月末、60歳 誕生日の月末で、JR東日本を定年退職しました。JR発足時はメンテナンスを担当、その後 東北線の運転手となりました。ブルートレインや、電気機関車、コンテナを引っ張るといった仕事です。47歳の時に管理職になり山手線の運転手さんの管理などをしていました。高校を卒業してすぐ国鉄に入り 42年間「ポッポ屋」でした。

2011年7月の新潟・福島豪雨で只見線の鉄橋が5、6ヵ所 流されたのですが、発生 当時 私はそのことを知りませんでした。退職する2年前ですか、毎日新聞で当時の 町長 目黒吉久氏が書いたコラムを読みました。『災害があるとローカル線は復活できない。だが復活させるべきだ』という内容です。それを見て一つのローカル線が存続の瀬戸際にあることを知り、職場の仲間に「みんなで行ってみよう」と声を掛け、只見を訪れました。

もちろん只見線と言う存在は知っていました。しかし、災害で分断されていることは知りませんでした。いざ来て災害現場を観て回るとそれは酷いものでした。「何で、こんなになってしまったのだろう」と思いました。自然の猛威を目の当たりにして「ここ（只見線）で働いている後輩も同じポッポ屋じゃないか、何とかしなければ」という想いがこみ上げました。これが最初のきっかけです。

その日の宿を紹介してもらうために役場を訪ね、布沢にある「森林の分校 ふざわ」を教してもらいました。泊まってみると、いつの間にか「いいところだなあ」という話になっていました。布沢には、都会にはない自然の豊かさや美しさがありました。布沢を訪れたメンバーは、第二の人生を考えるような年齢でもあり、のどかな里山の風景の中で、自ずと「こういうところって、いいね！」という話で盛り上がり、やがてこれが家探しへと繋がって行きました。

田舎に住むと言うのは難しいことかもしれません。でも都会との行き来であれば地域の活性化へ貢献できるし、ここを訪れた人は楽しい経験が沢山出来る。お互いの良いところをシェアするために、ここに拠点を作ってはどうかと思いました。皆で楽しく飲み、食べ、地域にお金を落とす流れが出来ないものか、そのためにこの魅力を整え、維持して行く、そこに自分の与えられた時間、人生を掛けてみようと思いました。

もし、あのコラムに出会わなければ、あのままの状態でしたら、私は関連会社へ再就職し、65歳まで働き、社会人としての使命を終わらせていたと思います。あの災害は地域を破壊し、深刻なダメージを残しましたが、同時に「ポッポ屋」としての私の気概を奮い立たせ、ここに私を導きました。只見の自然の美しさ、豊かさに出会った私は、退職後の人生をここにかけようと決めました。

退職に伴う諸手続きを上尾で済ませ、移動準備を整えて 2017 年 1 月 8 日に只見に移り住みました。A という場所に、ここから 1.5km 程離れた O 集落、U 集落の分かれるあたりに、既に家を買っていましたが、そこに移り、活動を始めました。

「縁樹の家」は、築 約 90 年の農家を改修した宿泊施設です。運営は「ほっとランド・フォレスト只見」が行い、私が代表、管理人をしています。資金は JR 同僚や、OB を中心に出資を募り集めました。出資者は 50 人位です。JR の OB、後輩の家族、子供たちが利用できる民泊施設として、また色々なことを体験してもらえることを目指して運営しています。料金は利用しやすいように 1 泊 3,000 円です。素泊まりにして、食事は自分たちでワイワイガヤガヤと作っています。現在は食事が提供できる調理機器、設備も整えてあります。しかし食事を提供するためには資格が必要となるのですが、この新型コロナウイルス禍で資格試験が実施できない状況で、落ち着くのを待っているところです。

「縁樹の家」が、いまの状態になるまでは、それは苦勞しました。1 階は、2016 年の秋にとりあえず住めるようになりましたが、2 階部分が未完成だったのです。いまは整理されたスペースが広がる 2 階ですが、昔の蚕の作業場がそのまま残っていたのです。お金を節約するため 1 階を施行してくれた建築屋さんに『素人でも解体はできますか?』と尋ねました。『出来ますよ』という答えを貰って、私と OB、いま一緒に働いている T さんらで、2 階の壁や棚の撤去を始めました。しかし、ここは冬の作業はできませんので、2 年越しの作業を経て 2017 年秋までかかりました。

2019 年 3 月 27 日付けで民泊許可を得て、2019 年 4 月 1 日にグランドオープンしました。



縁樹の家 全景

【家族】

退職する年の秋と、ここが完成してから何回か、ここに妻を連れて来ています。妻は「なぜ、それほど大変なことをしなければいけないの」と心配をしていました。退職する直前に、私に癌が見つかった事も影響したかもしれません。自分は、自分の想いを伝え、今まで時間に追われ忙しく働いてきたので、第二の人生はここにかけたいと話しました。時間を必要としましたが、妻は理解してくれました。いまは「ここはいいところだから、頑張っ

【不安】

退職する年の2月に癌が見つかりました。最初は盲腸だと思って病院に行ったのです。診察を受け、その日のうちに手術を受けました。1週間後 検査結果を聞きに行った際、執刀医から虫垂癌だと宣告を受けました。「発見しにくく、放置しておく

運の良いことに執刀医が会津若松 竹田病院でインターンをされた方で、只見に行くなら紹介状を書こうということになり、竹田病院で定期検査を受けて、今年で4年半が経過しました。そこだけが気になるところでした。どこにしようと定期的に検査をしなければなら

【現在】

最初からのメンバーTさんは、こちらに住民票を移しました。もう一人、昨年退職したYさんは、住民票は移してはいませんが「縁樹の家」に居住して、宿泊管理の担当をしています。今日は、お盆で檀家の集金があると言って、矢板（栃木県北部の市）に戻りましたが、私を含めてこの3人で「民泊」、「畑」、「田圃」をしています。

田圃は最初に分校前の棚田から始めましたが、陽のあたりが十分ではないので、去年の春から「縁樹の森」の裏手にある田圃も使い、今年は少しですが収穫できました。お米は「里山のつぶ」という品種です。

景観づくりも大切な仕事と考えていて、分校前の棚田、家周りの草刈りをしています。また今年 集落の人に相談して、桜の苗木を60本程植えました。

冬は、ほぼ除雪をして過ごしています。

【変化】

地域の方々が、私を受け入れてくれたことに本当に感謝しています。自然の豊かさに驚き、その中に居られることに本当に喜びを感じます。

移住して変わったことは、家族との関係がより良くなったことです。なかなか会えませんが、今までとは違った良い関係だと思います。家族と会うのが楽しみです。

1ヶ月に1回 お互いに行き来する感じです。このまえも妻に渡すものがあったので、会津田島の道の駅で待ち合わせをしました。館岩の先の前沢集落にまがりや屋のお蕎麦屋さんがあり、美味しいと聞き、そこでお蕎麦を一緒に食べました。その後 田島周辺を一周しました。

いまはお互いに、このような会い方しかできませんが、自分を支えてくれる家族との丁度良い距離が出来ています。会えば相手を思い合える関係です。

【将来】

時間に追われない、いまの生活が続くことが望みです。

縁樹の家の周りにはストーブ用の薪が積まれています。自分の家にもダルマストーブがあって薪を使います。山の中ですから、春になって雪が降らなくなると山に入ってチェーンソーで木を切って薪づくりをします。自分の持ち山ではなく、他の人の山ですが、木を切ってくれと言われれば駆けつけて、伐採して薪にします。これからも薪づくりが出来るように健康に暮らして行きたいです。

やりたいことは、やはり農業を極めたいですね。それは課題ですね。田圃をしていけば田圃に草を生やさせてはいけないとか、ちゃんと教わりたいです。

【不便】

暮らし始めて困ったことは、医療機関が遠いので少し不便を感じました。

でも病院はすべて予約制ですから、まあスケジュールは立てやすいです。

たまには会津若松に出て行くのもいいかと、買い物が出てらに行くのも良いと思っています。遠回りして病院に行くとか、せっかくここ（只見）に来ているのだから、色々なものを見てみたいですね。家内も、仏閣を見るのが好きなので、会津三十三観音の一つ「中田観音」、一本の原木から彫り上げられた観音様ですが、拝観に行き、御朱印を頂くといいことをしています。

【健康】

健康面で注意していることは、お酒が美味しくないと感じたり、飲みたくないと思うときは体調の悪い時なので、そんな時は飲まないか、早めに寝ます。好きなお酒は焼酎です。皆で集まって飲むときは日本酒ですね。

【アドバイス】

新型コロナウイルス感染拡大で、こんな状況となって「田舎もいいな」って言う人もいるかもしれませんが、そんなに簡単なものではありません。これは来た人が一番わかっていることですが「人と人との関係がとても大切」なところです。お互いに助け合う気持ちがあり、そのような関係が出来ているので、これを理解して、溶け込んで欲しいと思います。

こちらに来た時から、せつかく来たのだから何か地域のお役に立てればと思っていました。都会にいたときはそんなことは考えたこともありませんでしたが、ここに来ると、みんなのために何かをしたいと思いました。いま私は明和地区の庶務を担当し、明和の新聞も発行もしているのですよ。

自らの経験から言えば機械類を、すぐ購入するのではなく、少しずつ増やすことが良いと思います。機械類は高いものですから、まずは借りて使ってみるのがいいと思います。今年 三反二畝（約 1,000 坪 弱）（注1）の田圃を耕運機で耕しました。耕運機でするには広い面積でしたが、一生懸命やりました。あれやこれやと動いていると埼玉のOBがもう米を作らなくなったから田植機をくれるという話があり、さらには布沢の方からも田植機をあげるという話を貰いました。

（注1）一反=990 m²、一畝=99 m²なので、三反二畝は 3,168 m²。

1 アール=100 m²なので、三反二畝は 31,6 アール。

もう一つ例を挙げると、何と『トラクター譲ってあげるよ！』って申し出を頂いたのです。それも田越し、代かき用アタッチメントを付いていて、驚くような値段で譲って頂きました。さらに『車庫が空いているから置いていいよ』って、そんなことまで言って頂きました。譲って頂いた方の家は、お子さんたちが、皆さん東京などへ行ってしまい、いまは高齢のお婆さんの一人住まいでした。お子さんたちが冬に戻ることもありますが、普段の雪降しは大変なので、私たちが除雪を行っていました。

改めて、人と人との助け合い、付き合いが大切だということを教わった気がします。

【生活】

ご近所とのお付き合いで心がけたこととは、先ず「挨拶」でした。最初は『お茶飲んで行け』って、そこから家に呼ばれる、そんな挨拶廻りをしました。

子育て環境では、これ以上の学校統合は可愛そうな気がします。そのような話を聞くこともあります。何とか食い止められないものかと思います。この地区は子供が多く、子供を産んでここで育てようと頑張っている方も沢山いますので、少しずつでも、そのような方々を支えるという意味で、行政にもそれを優先で頑張ってもらいたいとは思っています。

私はよくセンターに立ち寄ることがあるのですが、子供たちは午後4時頃センターに寄り集まっていますね。すると、向こうから「こんにちは」って言うのです。東京や埼玉ではありえないことです。絶対にないでしょう。小さいコミュニティーだからかもしれませんが、普通に挨拶できるというのは、ちゃんとした教育がされているのだと思っています。人として基本の教育がされていると思います。

大人だって全然知らない人に会っても「こんにちは」って挨拶をします。ここは松坂峠を超える車も通りますが、布沢への出入りは1本道なので、道を走る車はほとんどここら辺の人ばかりなのです。車のナンバーを覚えるようにして、ナンバーを見て『あっ、誰々さんが来た!』って、手を振ったりしますね。

【印象】

移住して最初の印象はやっぱり雪ですね。あれは凄い。だけど、面白い。小さい時から雪が大好きでした。除雪は朝夕することもあります。でもだんだん雪は少なくなっています。私は布沢に来て4年目を迎えますが、雪は少なくなっている感じがしますね。

2020年8月14日 「縁樹の家」にてインタビュー
インタビューアー 移住コーディネーター 生天目 博

「只見 移住物語」

おおぎやほんかん
扇屋本館 つばめ荘

【移住者のご紹介】

- ・お名前：広井 トヨ子 様
- ・いつ：2003年（平成15年）12月14日
- ・どこから：福島県 福島市
- ・どこへ：只見町 只見地区 只見区
- ・今していること：おおぎやほんかん扇屋本館 つばめ荘（下宿業）（注1）

（注1）扇屋 本館 つばめ荘

1937年（昭和12年）「扇屋 本館」が、呉服、雑貨、米、塩、山菜仕入などを扱う総合商店として誕生する。第二次世界大戦を経て、戦後国策復興として進められた只見川電源開発に沿って1953年（昭和28年）田子倉ダムの着工があり、その翌年1954年（昭和29年）に旅館「扇屋 本館 つばめ荘」がオープンする。

以来「扇屋 本館 つばめ荘」は電源開発関係者、政府要人、著名人の宿泊、休憩施設として只見町の迎賓館としての役目を果たす。後継者難と高齢化のため1994年（平成6年）最後の宿泊客を見送りして、その歴史を閉じた。そして2004年（平成16年）に、再び扇屋 本館 つばめ荘としての歴史を紡ぎ始める。

「扇屋 本館 つばめ荘」に宿泊、立ち寄った電源開発関係者・政治家・著名人 一部抜粋（敬称略）

- ・皇族 鷹司の宮
 - ・皇族 高松宮
 - ・政治家 吉田茂
 - ・政治家 田中角栄
 - ・政治家 三木武夫
 - ・小説家 司馬遼太郎
 - ・小説家 曾野綾子
 - ・大相撲 第四十一代目 横綱 千代の山
 - ・女優 音羽信子
 - ・歌舞伎俳優 中村吉右衛門
 - ・米国 海外技術調査団(OIC)一行
- ・まえにしていたこと：福島市 交通安全 母の会、福島 いのちの電話、他ボランティア



つばめ荘 扇屋本館 ロビーにて

福島市ではボランティア活動をしていました。「福島市 交通安全 母の会」とか「福島 いのちの電話」のボランティアです。お友達に頼まれてサークルを立ち上げるのを手伝ったりしていました。役員名簿を作ったり、会の規約を考え、ワープロ(当時はワープロ全盛期)で文章にまとめたりする作業とか。気がついたら肩書きが20以上あって、疲れはしませんでした。自分の時間はすくなくってですね。

只見町を知るきっかけは、ある新聞記事を見たことです。『老舗旅館売ります』という記事でした。読売新聞(2003年6月8日付)(注2)に載っていました。この記事を読み、只見町のことを知り、この建物が頭から離れなくなってしまいました。

(注2) 読売新聞(2003年6月8日付) 掲載記事から一部抜粋

『戦後復興の国策として進められた電源開発に際して建てられ、ダム工事の視察に訪れた吉田茂・元首相らが宿泊したことで知られる只見町只見の老舗旅館「扇屋 本館 つばめ荘」が、建物の老朽化などから売却されることになった。政治家や女優、大相撲

の力士など「昭和」を彩る著名人も数多く宿泊した“歴史の証人”ともいえる建物だけに、関係者は「このまま保存してくれる人買い取って欲しい」と話している。』

記事を見てすぐに只見町を訪れました。当時 幾つものボランティアやサークルの役員をしていましたので、なかなか時間がとれませんでした。この建物を扱う不動産業者「T株式会社」と打合せできる日を決めて訪れました。確か日曜日だったと記憶しています。建物を見るなり、一目惚れしてしまいました。その日に購入契約をしました。

【準備】【現在】

この建物を買った時点では旅館業とか下宿屋をするとか、そんなことは全く考えていなかったのです。この家を心底 好きになったので買いました。

私の苗字が^{ひろい}広井でしょ、だから私、よく冗談でお友達に「苗字が^{ひろい}広井なのだから、^{ひろい}広い家に住みたい」って言っていたの。だから福島市でも、色々な人に声を掛けて家を探していました。「あれはどう」、「これはどう」と声を掛けてもらい、見て回りましたが、なかなか眼鏡に叶うものがなくて、諦めかけていたら、この建物に出会いました。建物を見に来た日に購入契約しました。

暮らし始めるために改修工事が進みました。確かに「^{ひろい}広い家に住む」ことが希望でしたが、あまりにも大きいので、あの階段の奥から先の部分を取り壊しました。そこには旅館の台所やお風呂といった「水回り」がまとめられていたので、私が暮らすための「水回り」を作る改修工事をしてもらいました。

ボランティア、サークル仲間や、お友達から「どんな家を買ったの」、「家を見たいから連れて行って」と言われ、私が旅館に残された備品等を整理するために只見へ来るときは、誰かしらを車に乗せ連れて来ました。改修工事も終わり、いよいよ福島市から引っ越す時には、それまで「貴女が只見へ行ってしまったら、この会を誰がまとめるの」とか「寂しいから行かないで」と言っていた人達が、みな理解してくれて気持ちよく送り出してくれました。20を超える“お役”を、引っ越しに伴いすべて“役落とし”しました。今年で17年目になります。

私は、福島市から只見町へ移り住んだことを「移住」とは考えていません。私の気持ちは「移住」といった重い感覚ではなく“ちょっと住む場所が変わる”そんな感じですね。ですから不安を感じたことは全然ありません。まったく血縁関係があるわけでもないけれど、この建物の中にいると、全身がフーッと包まれるような、古巣に戻ったような感覚になります。本当に安心して暮らしています。近所の人「あんな大きな家に一人でいて、怖くないのか」って心配してくれますが、なにも怖い事なんかありません。

2004年（平成16年）役場から頼まれて只見高校の山村留学生3人、4人受け入れたことがありました。それが下宿屋の始まりでした。いまは工事関係の人を中心に受け入れしています。

冬の間の除雪は、スノーダンプでしています。私一人で。そのの堀に雪を運んで落とす作業を、何百回と一日中しています。朝3時ごろブルが通ると、旅館の出入り口前が雪でふさがってしまうでしょ、雪が固まって塞いでしまうので出入口を空けないと、お客さんが外に出られなくなってしまうので雪かきしています。堀の水が雪を持って行ってくれるのでありがたいですね。先ず出入口をやって、お客さんがいる時は、車を置く場所は自分たちで除雪して下さいってお願いします。工事関係のお客さんなので『会社に、いろんな機械があるから大丈夫だよ』って協力してくれます。

除雪は、ほとんど私一人で、今のところはやっています。そのうち体力が無くなったら、機械を持っている人にお願いすることになるかもしれません。でも私は冬が来て除雪は楽しみにしています。雪は好きです。スポーツクラブに行っているかのように汗をかいて健康面にも良いでしょ。



つばめ荘 扇屋本館 角から撮影

【変化】【将来】

何も役を持っていないので、好きなように時間を使えるので、のんびりと暮らしています。行きたいときに、行きたいところへ行く。ただお客さんがいるので、毎日三度の食事があるので遠くにはゆけません。一人だから大変でしょうと言う方もいますが、一人だから気楽にできるのかもしれないね。

私はこういう商売が自分に合っていると思います。天職だと思っています。楽しくてしょうがないですよ。それも、この家に巡り合えたからです。体が続く限りこのまんま、お客さんを泊めて、食事を作って生きていきたいですね。

体が続く限りは、よほどの大事件、大事故がない限りね。そう事故と言えば9年前に大水害(2011年7月 新潟・福島豪雨)がありましたけど、そのこのふすまの汚れ(水が上がってきたライン)まで水が来たの。だから1階は、床板をはがして、土台から全部を新しくしました。だから建物は古いけど、下(主要構造体)は若いのよ。

楽しみにしていることは毎日の仕事、後はコロナ禍が収まって孫が来てくれることかな。今年 生まれた孫の顔をまだ見ていないの。

【不便】

只見の生活には、すーっと入り込めたので、暮らし始めて困ったことはありません。

【健康】

元気です。お医者さんに通っていません。いたって健康です。

【アドバイス】

助言はありません。来られる方の理由がそれぞれ違うし、どのような生活をしたいか違うわけだから、そこへなんだかんだと言っても、その人流に生活して生きて行かなければならないので助言というものはありません。

【生活】

自然体を心がけました。ご近所のおばあちゃん達は定期的に薬を貰いに診療所に通っているでしょ、その送り迎えをしました。診療所への送り迎えは午前中なので、お客さんがいても出来る。出来ることを、無理なく、気がつけば、何年もしていましたね。

2020年9月4日 つばめ荘 扇屋 本館 ロビーにてインタビュー
インタビュアー 移住コーディネーター 生天目 博

「只見 移住物語」

二地域居住者

【移住者のご紹介】

- ・お名前：高原 豊様（64歳）
- ・ご家族：郁子様（妻 62歳 伊達市）、実母（89歳 伊達市）、長男（独立 36歳 東京）、
長女（独立 33歳 福島）、次男（30歳 只見町）
- ・いつ：2009年（平成21年）4月
- ・どこから：福島県 伊達市
- ・どこへ：最初 只見町 町営教員住宅、現在 只見地区 館ノ川区 自宅
- ・いましていること：薬草栽培（芍薬 他）・自然ガイド
- ・まえにしていたこと：福島県庁 職員



ご自宅の居間にて撮影

【始まり】【準備】

福島県立医大（福島市）の事務局 勤務からお話しましょう。2006年（平成18年）から2009年（平成21年）福島県立医大（福島市）の事務局で働いていました。朝6:00に起床し、7:00のバスに乗り、医大に行く。忙しい時は、帰宅が11:00頃と言った生活をしていました。県職員って結構働いてしまうのですね。時には徹夜することもありました。19:00前に帰ったことはありませんでした。いま思えばハードな生活をしていたと思います。事務局では国際交流といった企画に関する仕事や、大学評価の取りまとめをしていました。

福島県立医大 事務局の勤務期間は大体3年間なので、次の異動先希望を出すことになりました。異動先に「福島」とか別なところの名前を書いても通らないことは知っていました。友人から「南会津って書けばすぐ通るよ」と聞いていたので、自然がいっぱいだからいいだろうと希望を出しました。「南会津」と希望を出したら、なんと即 只見で決まりました。

話は少し脇に入るかもしれませんが、大学での私の専攻は生物学でした。私は、生物学専攻で県事務職員になった変わり者です。生物学を選ぶと就職するところがありませんでした。教員とか、他には研究員もありますが、当時は不況下で研究員の職もありませんでした。学部を卒業してそのまま大学院へ進学、修士号を取りました。大学院の専攻は「環境科学」、学際的な分野で経済学も学びました。そして一般職として県庁に入りました。県庁では自然保護関係の仕事もしたことがあります。

話を戻して、2009年（平成21年）只見高校 事務長として只見に赴任しました。只見に来てみると水は美味しいし、空気もいい。伊達も水は美味しいし、空気もいいと思っていましたが、只見に来てみるとまた一味違いました。学生時代 ワンダーフォーゲル部において山歩きばかりしていて、社会人になってからも年に2~3回山登りしていましたが、ここにいると山に行きたいとは思わないのです。山の上に住んでいるみたいです。「ここはいいなあ。」と思いました。

もともと自然が好きで、只見にはコウモリ フェスティバル（2006年）とか、第二回ブナサミット（2008年）の時に訪れていました。4月に赴任してきて、5月に、地元の「只見の自然に学ぶ会」主催の探鳥会に参加しました。そして、そのまま「只見の自然に学ぶ会」に入りました。そこで、その後 私の暮らし、生き方に大きな影響を与えることになるKさんや、Iさんと出会い、交流が始まりました。

最初の住まいは只見町 教員アパートでした。冬期間は除雪車が出ると、教員アパートに住んでいる人がみんな朝早く出て、車庫の前を雪堀りするのです。私は雪が好きで、雪は苦になりません。が、実は寒がりで、さすがに雪堀りも1か月間すると疲れました。とは言え夏も夏バテもしますけど。

【家族】

私が只見に赴任してから、妻は私の様子を時々見に来てくれました。妻は、図書館司書の資格を持っていて、本好きで、自然も好きです。一緒に山登りや野山を歩いたりしていました。妻も只見がすぐ好きになり『そのうち只見に住みたいね。退職したら伊達と只見を行ったり来たりしようか』と言った話をするようになりました。

ほぼ3年で転勤となる、只見を出るということは、おおよそ過去のパターンでわかっていました。前任者も、ほぼ皆さんが3年、3年で動いていたからです。只見に来て3年目の時に、この家（T区）を借りました。「只見の自然に学ぶ会」でお友達になったKさんの家に遊びに行こうと通りかかった時に、この家を見つけました。「この家 空いているなあ」と思い、「あそこ借りたい」と声をあげました。どこかにいいところ（住まい）がないかと探していた時でもあり、まさにKさんと同じ集落だし、Kさんに仲立ちをしてもらい借りることが出来ました。

この家は、伊南川の縁にあり、景色のよいところです。でも（台風や豪雨で）水が上がってきたときは怖いので、いま国道わきに引っ越すことを考えています。この前は、水がすぐそばまで来たのです。用水路の底が、ひたひたになるくらい水が上がってきました。引っ越し先は国道の向かい側のパン屋さんの数軒先にある空き家です。空き家バンクに登録されたので、いま必要な手続きを進めています。この家（いま住んでいる家）は、購入したので、農作業用の倉庫として使うことを考えています。実はタップダンスをしているので、その練習場としても使いたいなと考えています。

只見高校から異動した後は、伊達市の県立 梁川高校に2年間、同じく県立 保原高校に2年間 勤務して、定年を迎えました。県庁での勤務年数は「35年」となっていました。最後の4年間は伊達市の自宅から勤務先へ通勤していました。只見へは、土日とか休みの時に来て遊んでいました。娘も時々一緒に遊びに来ていて、ご縁があって隣町へ嫁ぎました。いまは孫を連れて時々遊びに来てくれます。孫は女の子で、実にかわいい。冬は11月下旬ごろ伊達市に戻り、4月上旬から中旬に只見に戻る生活をしています。

只見に住むことに関して不安に感じたことはありません。気がかりは高齢な両親のことでしたが、当時は2人ともに元気でしたので大丈夫だと思いました。父親は、私が退職してすぐに他界しました。母を自宅で介護しているので、冬の間 私が伊達に戻った時は母の昼食を作ったりしています。妻はパートとして市立図書館に勤めていますので、妻が勤務でいない時にだけです。

またボランティアで、福島大学の植物学の研究室へ行って植物標本の整理をしています。新しく出来た植物標本を配架する作業です。植物の分類に従って、並んでいる棚の中から同じ種類のものを探して、そこに置いたり、分類が変わったものの並べ替えとかをしています。

ます。植物標本の図書館みたいなことですね。

大学での私の専攻は「生物学」だとお話ししましたが、研究テーマは水質、水の富栄養化でした。大学が茨城にありましたので霞ヶ浦の富栄養化に関連して、例えば「窒素とカリウムとかがいっぱい入っている」といったようなことを研究しました。水質研究、分析って、専門の器具がないとできないのです。機械も高いし、個人ではできないのですが、フィールドワークなら道具がなくても出来ます。現場を歩いて「ここには何がありました」、「ここには何がありました」と言って標本を採って歩くのが楽しいです。

それに山歩きが出来るのでいい。分類、研究は先生にお任せして、私はこの地域で採集したサンプルを研究室へ納めたり、標本制作をしています。実は只見周辺の標本はあまりないのです。福島近辺や会津若松近辺の標本とか、中通りの標本は多いのですが、只見周辺の標本は少ないそうです。だから先生には喜んでもらっています。



伊南川ほとりにあるご自宅（背景の山と自宅との間を伊南川が流れている）

【現在】

町おこしにならないかと思い Kさんと芍薬栽培を始めました。ダム工事では人口が増え良かったのですが、やはり一過性で工事が終わればそれでおしまいになってしまいました。人口は減るばかりで、何か新しい産業を作らなければいけないと思ったのです。

「新しい産業を作らなければ」この想いに至るきっかけは、只見高校で勤務していたときの体験にあります。町に働き場所がなく、只見高校を卒業した生徒が、町を出て行くのを見ました。南郷トマトのようなしっかりした地場産業があれば、高校を卒業した子供たちは生まれ育った町を離れることなく、ここで生活して行けるのにと、切実に思ったのです。

たまたま私の友人に、梁川で漢方薬を取り扱っている人がいて、彼が言うのには『中国で漢方薬を消費する量が多くなって、日本に品質の良い漢方薬が入ってこなくなると漢方薬の価格がどんどん上がっている。だから日本でも生産しなければならなくなるから、お前やらないか』って言われ、「薬草で町おこしできないだろうか」というアイデアに至りました。

2年前に「芍薬栽培始めました」というキックオフ セミナーをやりました。偶然 私たちが作っている芍薬について、会津医療センターで漢方医学をされる先生の知るところとなり「薬の地産地消」を目指して朝鮮エンジンを会津若松周辺で作っていることもあり、芍薬を作っているなら只見の芍薬を使いましょうという話しに展開したのです。

福島産なので残留農薬だけでなく放射能も計測しています。放射能は全く問題ないのは明らかでも、やはり風評被害みたいなものがあり使ってくれない、売れないかもしれない。それなら地元 福島県内で消費したら「いいだろう」と、これが「薬の地産地消」と結びついて、会津医療センターに納めているところです。

薬草栽培は、契約栽培というやり方をしています。^{とちもとてんかいどう} 栃本天海堂（注1）という生薬問屋から種苗を購入して、育てて出荷するシステムです。薬草栽培って育成はできたとしても、販路を探す事が難しい事業なのです。「これやったらお金になる」って言われて育てても、販路は自分で探して下さいでは、難しいです。また薬草は品種によって薬効成分の含有量が低いものもあるので、生薬問屋としてもやはり薬効が十分にあると判っている株でないと買いません。だから自分のところで育てた品種の種とか苗とかを育ててもらって、それを買取るシステムが存在しているのです。個人的（小規模）に育てて売るのは全然関係はありませんが、大々的にやって使うとなると組織的な枠組みに組み込まれてゆくこととなります。大きな会社、例えばツムラとかが構築したシステムに組み込まれるのです。

（注1）株式会社 栃本天海堂 本社は大阪市北区。漢方・漢方薬の輸入、栽培、製造、販売までを一貫して行うメーカー。

当帰（トウキ）（注2）という薬草があります。当帰は主に女性用の漢方薬に沢山入っています。2年で収穫できるのですが、過去に作ったのはいいけれど、売り先がなかったという事例がありました。仲介していた会社がつぶれてしまって、売り先が無くなってしまったようです。田島でもやったけど、それは完全に売り先が見つからなかったらしいです。薬効成分が低いかなんかで、買い取ってもらえなかったとか。只見でもその昔、芍薬の花栽培をしていた人も、根を漢方薬用に出していた人もいたと聞いたことがあります。

（注2）トウキは、セリ科シシウド属の多年草。根を薬用とする。漢方薬として冷え性、貧血など婦人病に用いられる。

芍薬は植え付けから出荷までに5年かかります。漢方薬としての芍薬の効果は、例えば

引き攣り^{ひきつり}とか胃痙攣^{いけいれん}の痛み止めとか、筋肉の痙攣^{きんにくけいれん}などに効果があると言われています。

葛根湯^{かつこんとう}（注3）とか有名なものは芍薬甘草湯^{しゃくやくかんぞうとう}があります。お腹が痛い時とか、色々な痛み

に効くと言われています。漢方薬は単体で使うのはまずなく、経験的に副作用を抑えるようにほかの薬と混ぜて使っています。いま挙げた「葛根湯」って葛の根だけではないのです。他にもキノコとか芍薬が入っています。いま芍薬を育てているメンバーは私を含めて8名です。

（注3）「葛根湯」は、かぜの初期などの頭痛、発熱、寒気がするといった場合に有効な漢方薬。

【変化】

移住して良かったと感じる事は、定年後に時間を持て余すことがないというのが、とても素敵な事だと思います。芍薬の作付面積は約25a（1a=100㎡）で、日々除草に追われています。芍薬の育成管理は除草が主な仕事なのです。芍薬全体によく日が当たるよう除草をして、根を太く大きく成長させます。水はほとんど与えません。6月頃よほど乾燥しているときに苗に水を与えます。

やってみると芍薬栽培は手間がかかる割には、買い取り単価が安いので利益が薄いように思います。人件費に見合う見返りがまだ出ないので、これでは人に勧められないと思っています。生薬問屋に言わせると「農薬を使って大規模にやり、出荷量を増やせば、ペイするはず」と言うのですが、メンバーの「薬草に農薬は使いたくない」と言う想いもあり、悩ましいところです。

【変化】

移住して変わったのではなく、定年になる7年前にはもう只見に来ることを考えていて、5年前には「芍薬を作りながら、自然ガイドをする」と決めていたので、そのままです。現役時代 子供たちに「只見に行って山歩きや、雪堀り、スキーしよう」って連れてきてい

ました。歩くスキーや山歩きが好きで、子供が小さい時から連れて遊んでいましたので、「ここは、やりたいことはなんでもできるどころ（遊び放題）だぞ」って、子供たちも、自然が、只見が好きになっていったと思います。

そうこうしているうちに娘は縁があって隣町に嫁ぎ、暮らすようになりました。これは大きく影響しています。娘が隣町に居るから、妻は「じゃあ、只見に住もうか」ってみたいなのになっています。将来は伊達の家を整理して、こちらに来ることになると思います。

【将来】

年金もあり食べては行けます。少しですが芍薬の収入もあり暮らしていけると思います。芍薬栽培の労働対価は目下のところゼロですが、マイナスにはなりません。

将来に向けて大きな不安はありませんが、唯一気がかりなことは芍薬栽培メンバーの高齢化です。主要メンバーのKさんは体力的にしんどくなって、体が動かなくなったら自分は栽培を辞めると、普段の言動からは想像できないような事を言いだしています。確かに、芍薬栽培は体に負担のかかる作業が多いため、少しずつ体が思うように動かなくなっていくと感じとれば、あと5年で辞めるか、10年で辞めようかと口に出るのでしょう。そうになったら「自分も止めようかな」と、一瞬考えることもあります。

生薬問屋からは「何人か組んで芍薬栽培をして下さい。一人栽培では契約をしません」と言われています。何人か組んでいないと安定した出荷が出来ないため、契約できないという理由です。メンバーが抜けて行けば、特に核となるメンバーが抜けてしまうと、やはり心細くなります。他にもメンバーは残りますが、それでも只見で芍薬栽培をしているのは私たちグループだけです。出荷量が減ると、売上に対する輸送料の比率が上がり、手元に残る利益はさらに下がってしまいます。兵庫県の指定された工場まで芍薬の根を送らなくてはならないのですが、その運賃が約10万円かかるのです。

私は薬草で町おこしと考え芍薬栽培を始めました。繰り返しになりますが、その理由は、高校を卒業した生徒の働き場所がなく、町の外へ出て行く姿を見て、生まれ育った町を離れずに、子供たちがここで生活していける手段を作らなければならない、これはゆるがせにできないと思ったからです。いろいろと勉強会もやりました。Kさんが主催する「のらさん（野良で散歩しよう）」というグループで、小さいお子さんを連れた若いお母さん達が加わり勉強会をしました。民宿、旅館で薬膳を出してもらい、薬膳に使う材料を提供（地産地消）できれば良い、こんなアイデアも考えています。只見は山を歩いていると薬草みたくなものが見つかる土地なのです。そのような薬草の山採り（自生している薬草を採取する）でもいいのかとも思っています。体が続く限り、やり続けようと思っています。芍薬より手間がかからず、より利益が上がる薬草がないかなと考え、ある薬草栽培に挑戦しています。これなら体力が衰えても育成出来そうなので、この薬草に期待しているところ

ろです。友人の漢方薬屋から株を分けてもらって始めました。友人が「自分のところでは結実しないが、只見ではよく出来ている」と言われました。もともと寒い地域のもので、北海道にもあるので、ここでも大丈夫です。雪の影響がどうなのかなと思っています。蔓性なので本当は葡萄の様に棚にしたいのですが、雪が積もるから棚にはできない。平棚を作れないので、どう栽培するか考えています。

【不便】

只見に最初に来た時に、お店が19時にしまってしまうのですごく困りました。朝、出勤の時には店が開いておらず、只見高校が終わってからだと18時を過ぎてしまうので買い物に行くのが大変でした。ヤマザキショップは22時まで開いていましたが、生鮮食料品はあまり扱っていませんでしたので、最初は買い物が不便でしたね。

でも、慣れてしまうと、ブイチェーンにしかないものしか買えませんから、かえって迷わなくていいかと思いはじめました。(前に買った)同じものでも良いか、みたいなことですね。田島にも買い物に行きましたが、今はほとんど行きません。たまに売っていないもの、例えば草刈り機の刃を買いたいときに行くだけです。伊達に行く途中で若松で買うこともあります。後はAmazonとか通販で買えますから、いまは全然不便は感じていません。私は使っていませんが生協は便利だと思います。

【印象】

ここに来てびっくりしたのは本屋さんがあったこと。米屋こめや(店名)さんです。びっくりしました。伊達の近くに本屋が無くなってしまったのに、ここには本屋さんがある。だから只見高校に勤めていたころは、本をよく注文させてもらいました。

お店が早く閉まり、遅く開くのはびっくりしました。只見高校時代 コンビニがないからお弁当をどうしようかって悩みました。「ちょっと、ブイチェーンまでお弁当を買いに行ってくる」って職場を抜けて買いに行きました。ヤマザキショップにもよく行きました。町の学生寮(現 奥会津学習センター)が生徒にお弁当を届ける際に、ついでに学校の先生にも届けますよって言うてくれたので、よく利用していました。あれはとても助かりました。

【健康】

私はタバコもお酒もしません。やはり睡眠は重要だと思います。きちんと眠ることが大切だと思います。10時位に寝て6時位に起きるようにしています。ところが10時に寝ようと思っても、なかなか寝られない。11時位になってしまうのです。また5時に目が覚めるようになって、11時に寝て翌朝5時起きとなると昼間きついんですね。県職員時代の夜遅くまで働く癖が付いて抜けないのかもしれない。

【アドバイス】

二地域居住される方へのアドバイスですが、あまり遠いところへ通うのは大変だと思います。本拠地とする場所から、通う所が遠いと大変でしょう。私の場合、伊達から只見まで車で約4時間かかります。高速を使っても下道を通ってもあまり変わりありません。

仕事で来ていて、ここがいいなって思って、チャッチャカ、チャッチャカと定年後はこうしようと生活プランを決めた事が良かったのかもしれませんが、定年後の準備は早く始めた方が良くって言われていましたが、やはりそうでしたね。

【生活】

地元の人と積極的に仲良くなると良いと思います。挨拶は大切ですね。自分は知らなくても、地元の方は「あの人は今度 高校に来た人だ」って判っています。こちらに来てやはり適切な助言、サポートをしてくれる方に出会えたことは、本当に幸運だと思っています。妻も『Kさんがいなければ、ここにはいない』と言っています。『いなくなったらどうしよう』とも、頼りにしていると言うことの現れです。

只見の方は人懐っこいです。只見の方は距離を置かずに、すぐに受け入れてくれますから。伊達、福島だと、最初少し距離を置いた話し方をされますが、ここではゼロから始まるのです。だから、自分から距離を置かないで付き合おうと、すぐに受け入れてくれます。

2020年9月15日 館ノ川 ご自宅 居間にてインタビュー
インタビューアー 移住コーディネーター 生天目 博

「只見 移住物語」

二地域居住者・民泊 ^{えんじゅ}縁樹の家 管理運営

農業

【移住者のご紹介】

お名前：^{やなせ}築瀬 栄一 様 61 歳

ご家族：弟（58 歳 栃木県 矢板市）、従妹（53 歳 栃木県 矢板市）

いつ：2019 年 1 月

どこから：栃木県 矢板市

どこへ：只見町 明和地区 布沢区 民泊 ^{えんじゅ}縁樹の家

いましていること：矢板市内 地元集落 会計担当、檀家役員
明和地区 布沢区 民泊 ^{えんじゅ}縁樹の家 管理運営
農業（米作・畑作）

まえにしていたこと：JR 東日本



縁樹の家 薪ストーブの前にて

【始まり】

移住する前は、JR 東日本に勤務していました。いわゆる現場にいた時は山手線、宇都宮線の車掌をしていました。特急 踊り子号で伊東にも行きました。山手線には 20 年ほど乗務しました。最後の 13 年間は、現場から離れ管理職でした。乗務員区の当直助役として最後は上野車掌区にいました。

根幹となる職責は社員の管理と育成ですが、通常業務は乗務員の勤務作成、電車運行状況が乱れたときの運休整理、乗務員の体調不良などによる欠勤の勤務送配、出退勤管理（アルコール呼気検査等）等をしていました。

勤務時間は基本的には出勤すると夜勤になります。出勤した朝から、翌朝までの勤務です。2 人で当直するので、早番は 9:00～翌 8:30、遅番が 10:30～翌 10:30 という勤務体制です。早番は早く就寝して初電対応（3:30 頃出勤する始発乗務員の対応）で、遅番は終電対応（1:30 から、遅い時は 2:00 頃に宿泊に来る終電乗務員の対応）をします。

基本 夜勤明けは非番になります。一徹（夜勤）をして、翌日非番になります。翌日に、二徹（夜勤）をして非番になります。勤務パターンは個人の都合による希望もあり勤務計画を作成する前に個人の希望を聞き取りました。140 名程の乗務員がいましたので勤務計画を作るのはやはり大変でした。

実は、車掌乗務には制約があって全員が全部の電車に乗れる訳ではありません。例えば、上野車掌区だと宇都宮線、高崎線、常磐線で、普通のローカル線ならだれでも乗務できますが、常磐特急は車掌になってから 1 年が経過しないと乗務できないのです。経験がないと特急には乗務できません。カシオペヤも、すぐに乗れるわけではありません。臨時列車はいろいろなところへ行きますので、それも一定の経験が必要で、すぐに乗れるわけではありません。見習いを経て、経験を積んで乗務するのです。ですから誰がどの電車線区に乗れるのか把握していなければ勤務作成は出来ません。

職場と自宅（栃木県 矢板）を新幹線通勤していました。新幹線ですからすぐです。東京で一人暮らしするよりも楽ですし、経済的です。宇都宮から新幹線に乗れば東京まで 55 分ですから。新幹線を利用した通勤だけでなく、通学の学生さんもいました。宇都宮だけでなく、那須塩原でも通勤圏ですね。新幹線は早いですからね。

60 歳で JR を退職しました。退職後も本人が希望すれば 65 歳まで会社の制度として関連会社で働くことが出来ます。給与は少し下がりますが働き場所を世話してくれます。退職者の 70%位は関連会社へ再就職したと思います。しかし、私は退職後に関連会社へ行こうとは考えていませんでした。自分のやりたいことを、自然の中で第二の人生を生きて行くことを決めていました。

退職する2年前位でしたか、私が58歳だったと思いますが、MさんとTさんが只見町 布沢で民泊 縁樹の家を始め、生活していることを知り、お二人とは顔見知りでしたので「私もここで一緒にやらせてほしい」と自分の想いを伝えました。すると、なんと「来てくれ」と回答があり、メンバーに加わりました。

「類は友を以って集まる」という格言がありますが、まったくその通りだと思います。それぞれの共通点や分かち合うものがある者は、仲間として自然と寄り集まるのでしょう。2011年7月 新潟・福島豪雨災害を目の当たりにしたMさんやTさんの「ここの復興に来た後輩も同じ鉄道員だ、何とかしなければ」という想いに、多くの人が共感、集まりました。その結果「縁樹の家」が生まれました。そして「縁樹の家」に都会の人たちが来ることにより、只見町との交流が生まれ、只見線の利用客も向上します。また自然の中での暮らしを体験し、年に数回 只見町に足をはこぶことにより関係人口が生まれます。願いや想いが同じ人達は自然と引き寄せ合い、一つの現実を作っていく人生の不思議、奥深さを体験しました。



縁樹の家 冬支度

【準備】【現在】

退職までの2年間 ここ（縁樹の家）を何回か訪れていましたし、作業も手伝っていました。こちらに来ることについて、不安は全く感じたことはありません。

趣味は登山、ゴルフ、スキーで、自然が好きでした。蒲生岳に1回登りました。今年後輩と浅草岳に登る計画をしていましたが、このコロナ感染で取りやめました。来年には状況を見て登ろうと話しています。浅草岳、朝日岳、蒲生岳は登りたいと思っていますが、なかなか時間がなくていけません。

いまコロナ禍でお客様が来ないので「縁樹の家」を仮住まいにしていますが、こちらでの住まい（空き家）を探していますが、なかなか見つかりません。

畑は、集落の人から「空いている畑を使っていいよ」と言われているので、少しですが耕しています。布沢のお米は美味しいので毎年注文を受けます。80袋（1袋30kg）を送っています。縁樹の家メンバーで作れたのは46袋でした。注文数に足りない分は集落内の農家からも調達しました

薪作りは、春先から始めます。そうでないと薪が乾燥しません。森林の分校 ふざわの前の棚田の草刈り、昨年 陽光（注1）という名前の桜を60本植えました。今月もその桜の雪囲いをします。

（注1）アマギヨシノと（天城吉野）カンヒザクラ（寒緋桜）を交雑させて作出した栽培品種。

あと森林組合の仕事を手伝って欲しいと声がかかり、杉の間伐をしています。大きい杉はそのままにしておいて、それらの間にある枯れたものや、生育の悪いもの、曲がったものを伐採します。伐採した杉は切りそろえて山の中に並べておき、自然へ戻します。早いもので、こちらに来て2年目を迎えます。

【家族】【二地域居住】

弟、従妹には退職したら福島県 只見町 明和地区 布沢にある「縁樹の家」というところで暮らしはじめ、実家と行き来する生活（二地域居住）をすると話しました。

実家（矢板市）と只見町を行き来して、住民票は動かしていません。いわゆる二地域居住と言われる暮らし方ですが、自分は長男なので最終的には地元へ帰らなければならないので住民票は只見町に移動させることはないです。いま部落の会計の仕事と、檀家の仕事があるので月に1回1泊で戻ります。車で2時間ちょっとです。塩原温泉から関谷に抜け、矢板に入ります。残りすべては「縁樹の家」で働いています。

【変化】

こちらに来て良かったと感じる事は、色々あります。周りの人達が温かく受け入れてくれた事、色々な野菜も頂けるし、お米も美味しいです。全部いいですが、やはり自分がやりたいと思っていたことが出来るのがいいですね。言葉では表現できない満足感を感じます。JR にいた 42 年間 組織の一員として働きました。組織は、組織の社会的目的を遂行するために、当たり前ですが組織の一員としての責任、行動が求められます。でも、いまは自らのペースで、自分がしたいと思ったことが出来るので、本当に最高です。でもね、実際にここで生活してみると、意外と忙しいです。集落の事業に参加したり、自分でやりたいことが新たに出来たり、また、それが楽しいのです。

【健康】

これと言った持病はありません。もともと体は健康です。若干血圧が高かったのですが、いま下がりました。夏の間スズメバチに刺されたりすると診療所に行くことはあります。あと歯医者にも通っています。健康で気を付けている事と言えば病気、怪我と睡眠をきちんと取るように注意しています。しっかり働いた後も、きちんと睡眠をとれば、翌日は疲れも回復していてすっきりしています。

毎日体を動かす生活なので体重も減少しました。食事も野菜が中心になる健康的な生活です。たまに揚げ物とかトンカツとか牛丼とかを食べたいなあと思う事があります。

実は昨年 100cc クラスのバイクを購入しました。T さんがバイクを持っていて、いいなと思って自分も乗り始めました。休みの日とかに T さんを誘って『ツーリングにいったらお昼(なんかボリュームのある食べ物)を食べてこようか』ってこともあります。昭和村に行くと松坂峠を越え戻ったりしました。あとは桧枝岐を訪れたり、前沢の曲がり屋を見に行ったりしています。走り、お昼を食べるツーリングですが、楽しいですね。

【将来】

最低でも 80 歳位までは、ここ(縁樹の家)で、健康に元気に働いていきたいです。住まいとして縁樹の家でずっと暮らすことはできないので、いま空き家を探しています。よい空き家があれば、M さんや T さんみたいに購入してリフォームしようと考えています。

今年すぐ近くの方が作っていた田圃を止めると言われたので、そこをお借りして本格的にお米作りを 3 人で始めたのです。その反対側のスノーシート側にも空いている田圃が 4 枚あったので草を刈って、土の中の石も拾い出し、畝りました。来年は 30 年ぶり位に田植えをするので、それが楽しみです。

【不便】

暮らし始めて困ったことは特にありませんし、いま困っていることもありません。強いて言えばウオカクが閉店してしまったのは不便ですね。月に1回くらいまとめてブイチェーンで買います。

【アドバイス】

ここに移住する方もおられれば、私のように移住はしないけど第二の人生を過ごす方もおられると思います。よく人生100年と言われるようになりましたが、学生時代が20年、会社務めに40年、そして第一線から退いてから、元気に働ける、動けるのはほぼ20年位でしょうか。自分の好きなこと、やりたいことをやれるのは20年間程（175,200時間）なのです。

退職後に何かをする希望を持っておられる方もいると思いますが、退職後に何をしたいかは退職後ではなく、退職する前からいろいろと考えて、構想をめぐらし、準備した方が良く、私は思います。そうすることで現役時代から豊かな時間を過ごせるでしょうし、175,200時間を有意義に使えらると思います。

実は、ここに来る選択以外にももう一つプランを持っていました。那須に三斗小屋温泉という電気もかよっていない秘湯の温泉があります。そこに煙草屋旅館という名前の山小屋があり、十数回通っていて顔見知りでしたので、そこで雇ってもらいたいと考えていました。よく山を始めた後輩に「山に連れて行ってください」とせがまれると、先ず初めての山として那須 三斗小屋温泉に連れて行ったのです。手ごろで温泉にも入れるので雇ってもらいたいと考えていました、

ただMさんとTさんが只見町 布沢で民泊 縁樹の家を始め、この話しを知り、「私も行きたい」と言ったら「すぐに来てくれ」という事で、こちらへ来ることになりました。

【生活】

先輩2人が、地域や地元の方々と信頼、信用の基盤を作ってもらったところに来ているので自分は幸せだと思います。一番心掛けることは、もちろん挨拶です。それから地元の草刈りや、老人クラブの草刈りとか、催し物、行事には必ず参加するようにしています。

2020年11月2日 縁樹の家にてインタビュー

インタビュアー 移住コーディネーター 生天目 博